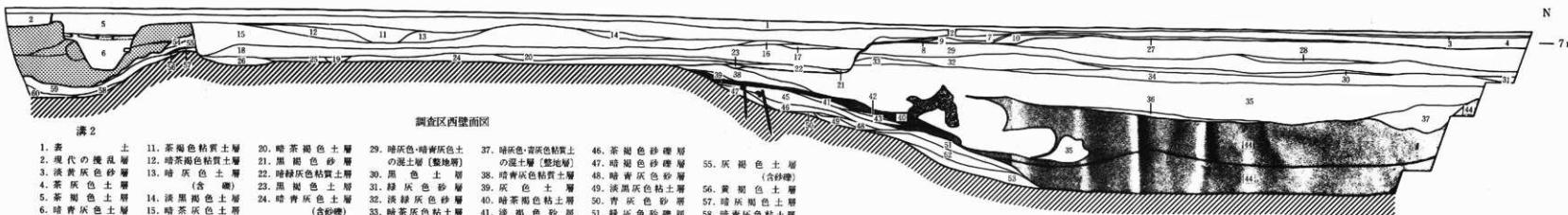
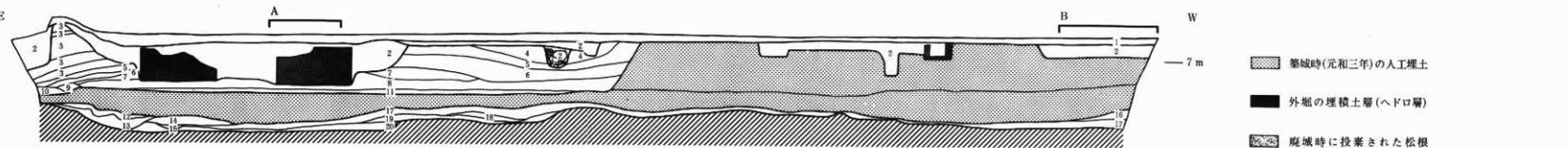


三ノ丸遺構平面図

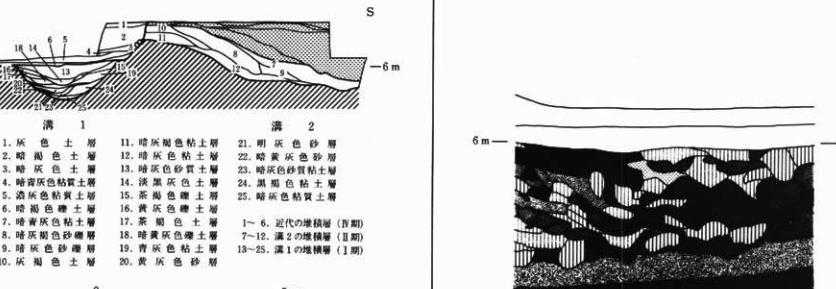
S



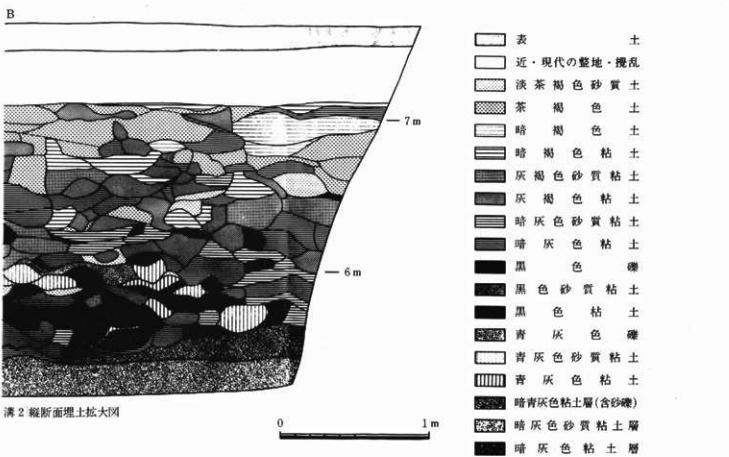
E

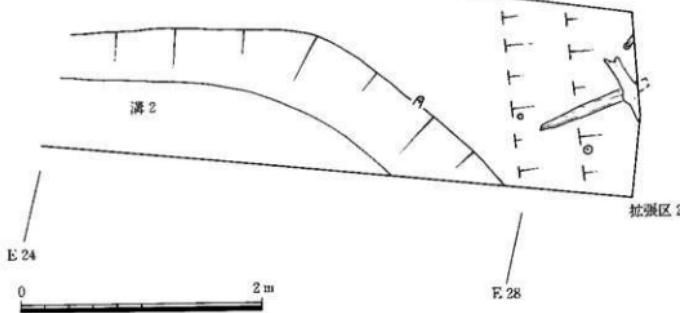
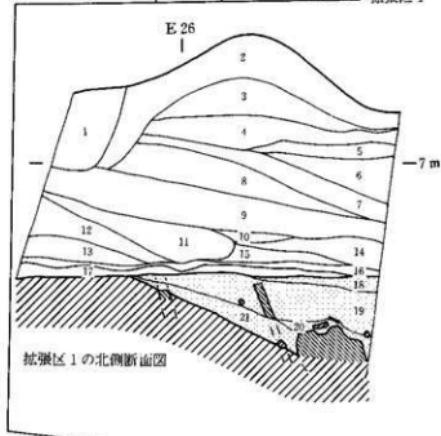
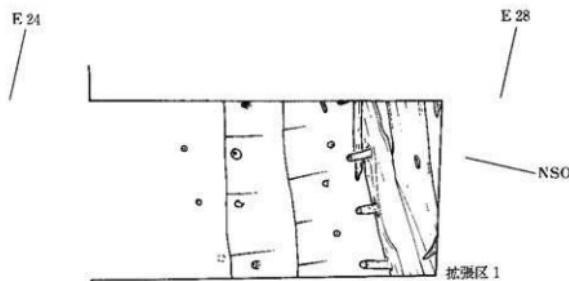


N

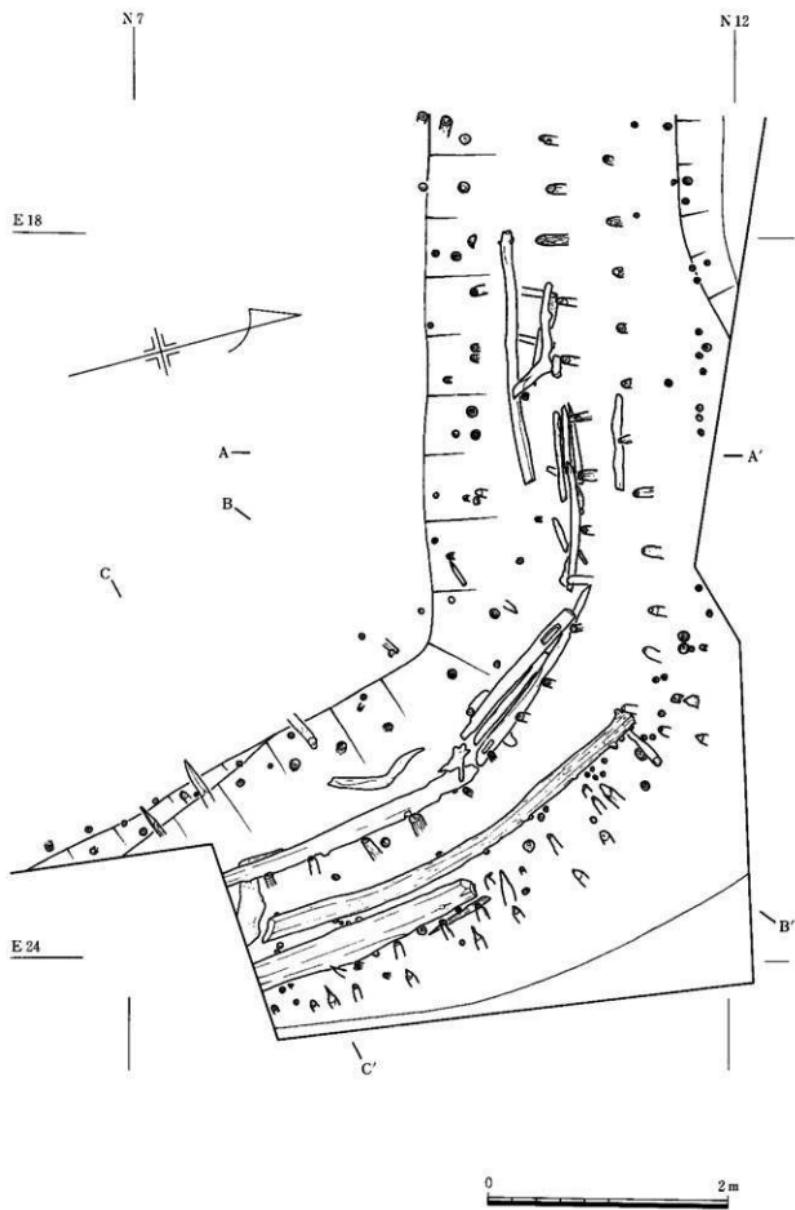


造構断面図

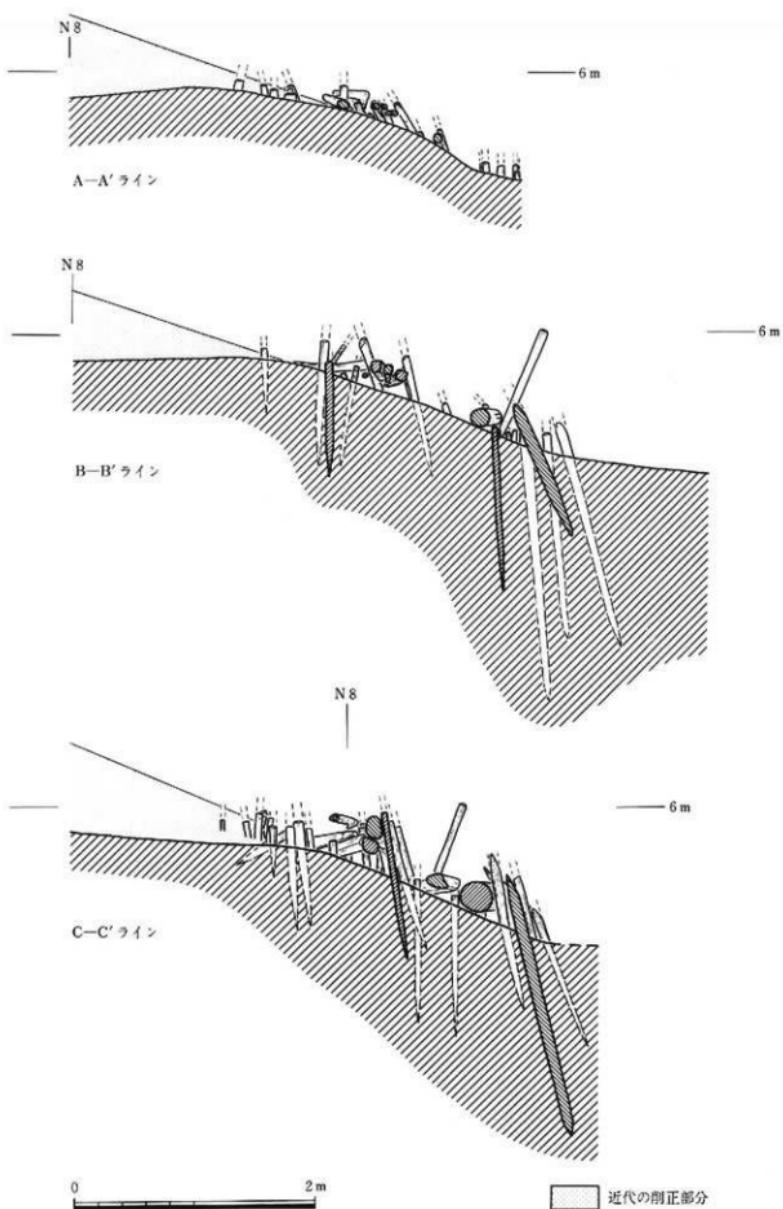




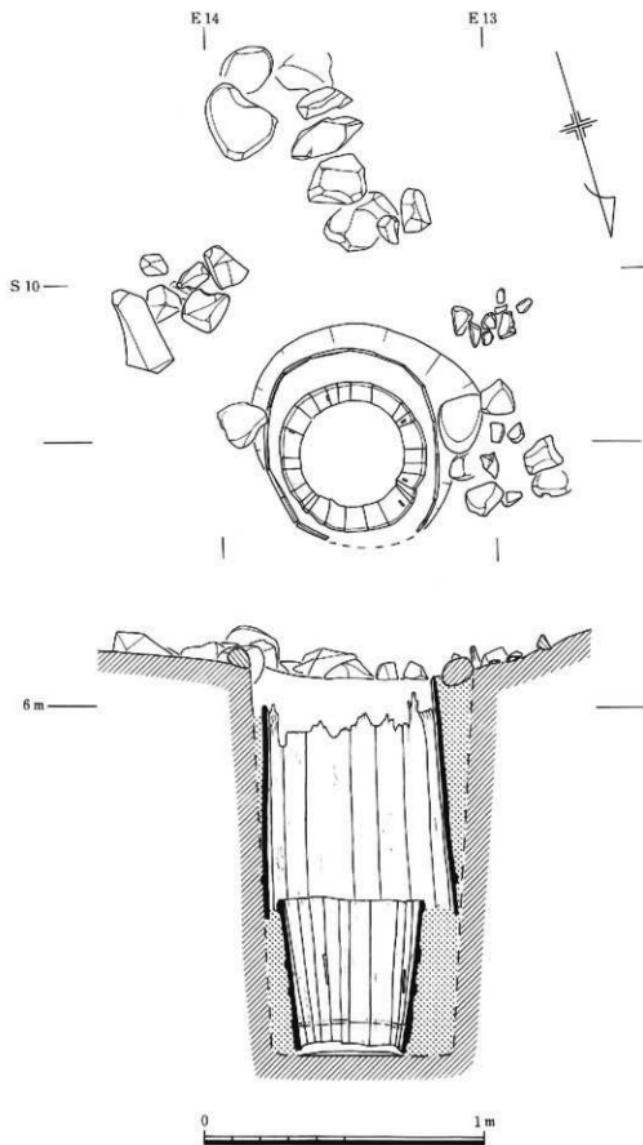
1. 暗灰褐色土层 2. 暗黄茶色土层 3. 黄茶灰色土层 4. 暗灰色砂质土层 5. 淡茶褐色砾土层
 6. 浅茶褐色土层 7. 暗褐色土层 8. 褐褐色土层 9. 暗灰褐色土层 10. 灰色土层
 11. 棕褐色土层 12. 暗灰褐色土层 13. 浅绿色灰色土层 14. 暗灰褐色粘质土层 15. 褐褐色粘土层
 16. 灰色粘土层 17. 暗灰色砂质粘土层 18. 棕褐色粘土层/含腐殖质粘土 19. 暗灰褐色粘土层 20. 暗灰色砂层
 21. 铁铝土粘土层/含腐殖质铁铝土



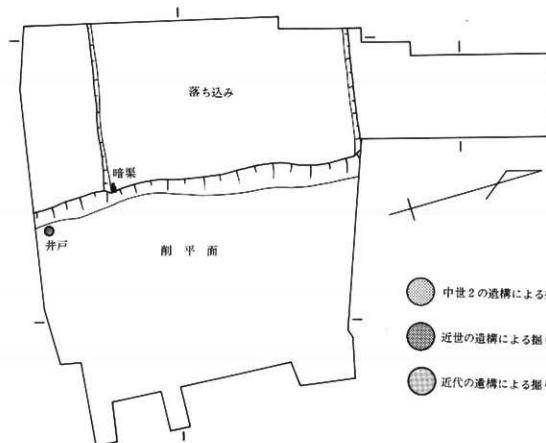
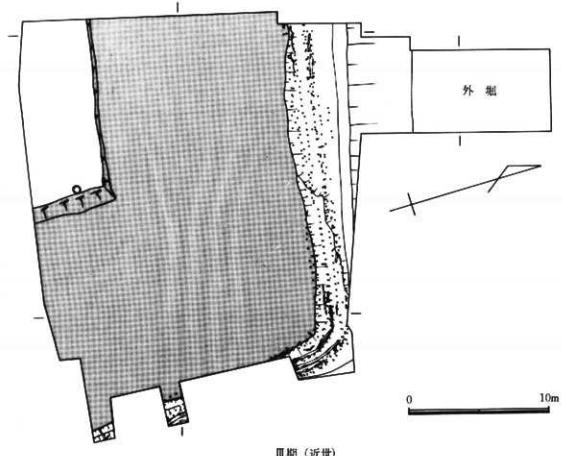
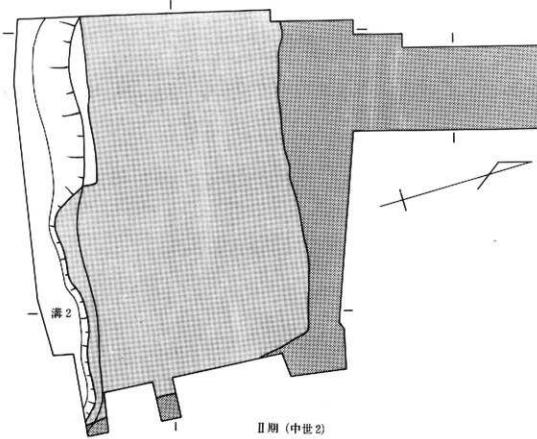
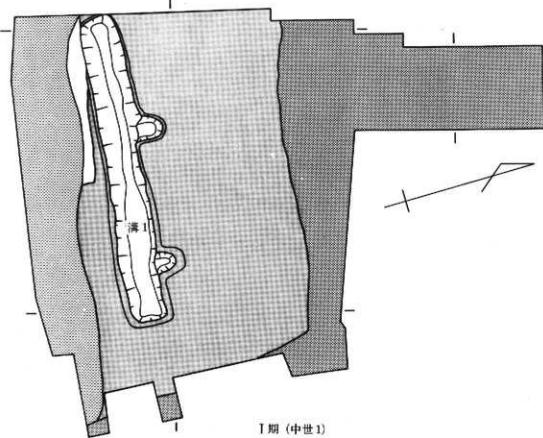
三ノ九 東北隅部の護岸施設（平面図）



三ノ九 東北隅嵩の護岸施設（断面図）



三ノ丸井戸



遺構変遷図

第2部

高槻城廄郭跡発掘調査概要

第1章 はじめに

高槻市立第1中学校では、体育館が老朽化したため、校庭の南西部に新体育館の建設が計画された。この場所は、17世紀の高槻城絵図によると、二ノ丸東側の厩郭に相当し、三ノ丸に通じる拱形門・橋・内堀が描かれている。このため、関係者と協議のうえ、昭和60年7月16日から9月末まで、新体育館建設予定地の発掘調査を実施した。調査地は、高槻市城内町1445、小字名は厩郭、調査面積は1,082.4m²である（挿図1）。

第2章 調査の概要

1. 遺構

調査地は、高槻城廃城以後、工兵隊の兵舎等が建設されたため、かなり攪乱されていることが予想された。そのため、重機で校庭の盛土と建物の基礎などを除去して作業を進めた。その結果攪乱された部分もあるが、調査区北壁の断面では近世高槻城前後の層序関係を明瞭に知ることができた。

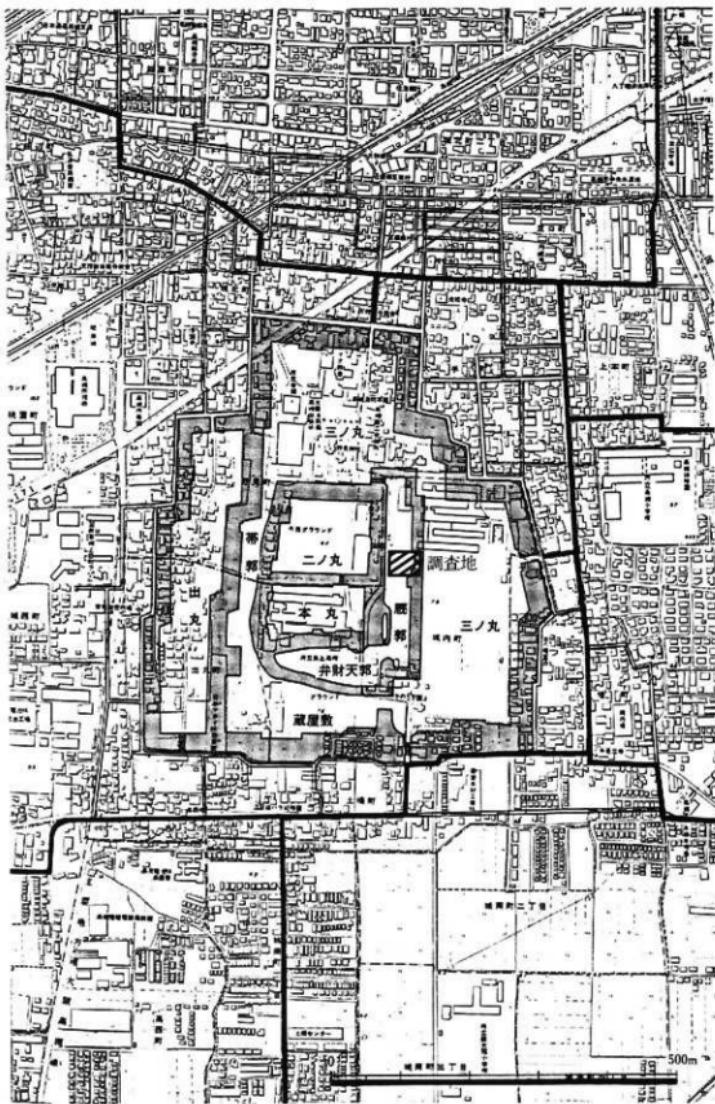
基本的な層序関係を堀肩部のやや西側（図版第5・17）でみると、盛土（0.2m）、整地土（0.3m）、灰褐色土（0.2m）、青灰色土（0.1m）、青緑色土（0.4m）、暗灰色粘土（緑色砂を混じえる・0.3m）、暗灰色粘土（0.3m）で、地山は青灰色砂砾である。

灰褐色土は内堀の部分にもほぼ均一に堆積し、北壁の西側では上面に漆喰が敷かれていたため、工兵隊兵舎建設時に整地された層とみられる。灰褐色土層下の青灰色土上面が近世高槻城の遺構面とみられ、内堀肩部もこの層を削削している。なお、内堀の肩部から内側にかけて大きなゴミ穴が検出された。内部から銃などの兵器が出土し、終戦後工兵隊の兵器を投棄した穴とみられる。

青灰色土を除去すると青緑色砂質土（西側では黄褐色砂質土）となり、溝1など近世高槻城以前の遺構が検出されたのをはじめ、明確な遺構には伴わないが瓦器椀や土師器皿が出土した。

暗灰色粘土は2層に大別されるが、弥生式土器・須恵器・黒色土器・土師器など、弥生時代から平安時代までの遺物を包含し、遺物のうえからは区別できない。

青灰色砂砾の上面では数個の柱穴を検出した。上部の暗灰色粘土層出土遺物からみて、平安時代とみられる。この砂砾は内堀肩部付近では平坦であるが、調査区中央から西側にかけて急に高くなり、漆喰を除去するとすぐに検出されるようになる。



挿図1 調査位置図

このように、当調査区では古代末期、中世～近世高櫻城以前、近世高櫻城の3時期を確認することができた。

以下各時期ごとに検出された遺構（図版第1・16）の概要を記していく。

古代末期（図版第2a・18）は、内堀の西北部で3m×2.5mの調査塗を設けて地山の青灰色砂礫上面での遺構の有無を確認した。その結果大小5個の柱穴を検出することができた。そのうちの1個は1辺約0.8mを測る方形で、他は直径0.2～0.4mの円形である。内部から土師器皿の細片しか出土していないため明確な時期は断定できないが、上部の暗灰色粘土や青灰色砂礫上面出土遺物からみて平安時代後半と考えられる。

中世から近世高櫻城以前の遺構としては、溝1・2、土塙1・2・3、井戸1、石敷がある。溝1（図版第2b・18）は調査区中央の北壁よりで検出されたもので、幅3.2～3.8m、深さ0.6mで直線状に掘られている。溝内の埋土は大きく黄褐色土・黄灰色土・青灰色粘土に分かれ。黄褐色土・黄灰色土はいずれも焼土を含んでいるが青灰色粘土は焼土を含んでいない。溝底に接して土師器皿が若干出土した他、黄褐色土・黄灰色土から備前焼・瓦質土器・土師器・中国製磁器・瀬戸美濃窯などの製品が出土した。これらの遺物類はいずれも破片であり完形に復元できるものは少ない。埋土の状況からみて、火災後の整地時に一気に溝が埋められたものとみられ、下層の青灰色粘土はその時までに、溝底に堆積していたものとみられる。

溝1の掘削された時期は不明であるが、溝底から出土した土師器皿などからみて16世紀中葉までには掘削されていたものとみられる。また埋没期は黄褐色土・黄灰色土出土の備前焼からみて16世紀後葉とみられる。

溝2は内堀の肩部と重複するように検出された。端部で拡張するが、幅約1m、深さ0.4mを測る。溝1とはほぼ同じ方向を示し、埋土は淡褐色土であるが、溝1同様焼土を混じていた。内部からの出土遺物はほとんど無いため、時期の確定はむずかしいが溝1と同時期に埋没したものとみられる。

石敷（図版第3a・19）は溝1の南側で検出された。攪乱や試掘時のトレンチで若干破壊されているが幅2m、長さ約5mにわたって挙大から人頭大の河原石を敷いたもので、溝1とは直交している。この石敷遺構の周辺は遺構検出面に炭や焼土痕が認められた。石敷に混じて瓦や備前焼の破片も出土しており、溝1同様火災後の整地をうけたものとみられる。

井戸1（図版第3b・18）は溝1埋没後に構築されたもので、長径1.05m、短径0.85mの梢円形の掘方である。掘方のやや東側に寄せて、河原石を積みあげ、すき間に瓦と備前焼の破片をつめて井戸枠としている。枠の内径は0.4mで、高さは0.2mを測るだけである。掘方の西側には枠の痕跡とみられる河原石が若干円形に配されていたため、造り直されたものとみられる。内部から中国製青磁碗・志野茶碗・唐津焼の破片が出土したため、16世紀末から17世紀初めの

時期とみられる。

土塁1は調査区西南部で検出された不定形の落ち込みで土師器皿などが若干出土している。

土塁2は溝1の東側で検出され、長さ3.5m、幅1.3m、深さ0.2mを測る。南端から不規則な小溝が南側へ延びていた。内部から瀬戸美濃産の天目茶碗が1点出土しただけである。

土塁3（図版第18）は調査区西側で検出され、L字状に掘りこまれた遺構である。幅1.5~2.0m、深さ0.5mを測る。短辺が約3m、長辺が約5m確認されたが、東端部が攪乱のため正確な長さは不明である。長辺の北壁に沿うように河原石が検出された。埋土の青灰色土・黄褐色土にも挙大の河原石が混じっており、元来は周囲を石積みにした遺構とみられる。埋土から唐津・備前焼などが出土し、16世紀末ないし17世紀初めに破壊、埋没したものとみられる。

他に調査区南端で数個の小ピットが検出されている。瓦器碗の破片が出土するところから南北朝期以前とみられる。また、調査区中央部は工兵隊兵舎の建物基礎によって大規模な擾乱をうけているため遺構の検出は不可能であったが、南北朝期以前の遺構が存在した可能性もある。

近世高槻城の遺構は城郭の東側を画す内堀（図版第4~6・20）が調査区東側で検出された。また、この内堀の南側では樹形門基礎の裏込めにされた栗石が検出された。

内堀は、まず青灰色土上面から約0.7m堀削して、幅約5mの平坦面をつくっている。そして、東側へゆるやかに傾斜するように地山の青灰色砂礫を掘削している。平坦面との境には、北側で約0.1m、南側で約0.5mの段差がある。段の上部と下部に直径5~10cmの木杭を打ち並べ、木の枝などをからめて護岸している。この護岸部分から東側に水が溜っていたらしく、底部の青灰色砂礫上面には黒色粘土が堆積していた。その上部には松葉を多量に混じえた腐植土が、さらにその上部に青灰色粘土が堆積していた。

なお、層序で述べたように戦後のゴミ穴が掘削されているため、肩部がゴミ穴によって削られている可能性もあるが、後述の樹形門基礎の掘方と一直線になるところから、内堀肩部として把えておく。

内堀の南側で検出された栗石は、内堀の肩部から東側へ約7m張り出している。栗石の北側には3m×4mの不定形な擾乱拡がある。この付近では、栗石の混じった黒色粘土から多量の瓦が出土した。また、黒色粘土からは一辺数1cmの花崗岩が2個出土し、調査区東壁の断面（図版第17）をみると暗灰色粘土が水平の堆積ではなく、かなり凹凸がある。このような状況からみて、樹形門の石垣が破壊された際、裏込めの栗石が周囲に散乱したものとみられる。

調査区の東南隅の拡張部分で栗石をたち割ったところ（図版第6b・17）内堀底部に堆積した黒色土上にかき出された栗石の状況が明瞭になった。栗石のつまつた樹形門基礎の掘方は、内堀肩部のやや内側から深さ1.4m、幅5mで、堀内側へ掘削されていた。掘方の底部は平坦で、内堀内部では約0.1mのたちあがりが確認でき、平坦面と滞水部の境の段とはほぼ一致する。

2. 遺 物

出土遺物は近世高槻城以前の陶磁器を中心とする遺物と内堀から出土した瓦を中心とする遺物に分かれている。

溝1（図版第7～9a）

土師質・瓦質製品をはじめ瀬戸美濃・備前・中国製磁器が出土している。焼土とともに投棄されたもので、溝の上層と下層で接合できた資料もある。

土師器皿（図版第7-1）は京都市山科本願寺出土例に類似し、内底面の外周から口縁にかけて「ノ」の字を指先で描いている。灰白色・精良な胎土で、重ね焼のため底部内外面が暗灰色を呈している。土師質の羽釜（同-3・4）は、口縁が「く」の字状で、口縁下が凹線状にくぼむものと、口縁が段をなし端部のたちあがるものがある。前者は、体部下半に凸帯の付くもので、いずれも煤が付着している。なお、ミニチュアの破片（図版第8a-12）も出土している。

瓦質の炉（図版第7-2）・鉢（同-5）・花瓶（同-9）が出土している。鉢は、内面に10本単位のおろし目があり、外面は口縁に7～8本の細い沈線を施し、下半は粗い篦削のままである。花瓶は瀬戸美濃の製品を真似たものとみられ、外面を菱形やわらび手文で飾っている。

瀬戸美濃の製品は碗・皿・水滴など灰釉のかかる小型品である。碗には平碗（図版第8a-5）と丸碗（同-6・7）がある。平碗は高台脇の段が明瞭で、丸碗はスタンプによる蓮弁文が口縁にみられる。皿（同-10・11）は高台内に輪トチ痕がある。水滴（図版第7-7）は扁平なもので、内部には、墨のような付着物がみられる。

中国製磁器には染付・白磁・青磁がある。染付皿（図版第8a-1）は端反りで、内底面に玉取獅子、外面に牡丹唐草文を描いている。この皿には前述の水滴同様、墨のような付着物がみられる。染付碗（同-2）の底部も出土している。白磁は高台に挟りのある皿（図版第7-8）と、端反りの皿（図版第8a-3）があり、前者は小野分類の白磁皿B群、後者は白磁皿C群である。青磁（同-4）は高台内側が露胎で、内底面に牡丹文がスタンプされた碗である。

備前には鉢・壺・壺がある。鉢には口縁があまり拡張しないもの（図版第8b-3～6）と大きく拡張して、外面に凹線の入るものがある。後者でも、口縁内側の段が強く、内面のおろし目が斜め方向のもの（同-1）と口縁端が斜めのもの（同-2）がある。壺（図版第9a-4）は端部が玉縁状になる無頸のものである。壺は口縁外面に凹線に入るものの（同-2・3）と、玉縁状で体部に篦削で×印を描き凸帯のあるもの（図版第7-6）がある。また、体部に何石入かを示す「入」の字を篦書きした破片（図版第9a-5）がある。

信楽（同一1）は壺の破片で体部に灰がかかっている。

石敷（図版第8a・10a）

石敷に混じって、瀬戸美濃・備前の破片が若干出土している。瀬戸美濃には鉄釉皿と輪トチ痕のある灰釉皿（図版第8a-13・14）がある。備前には、口縁端内側に凹線状の段のある鉢と壺の破片（図版第10a-1・2）が、信楽とみられる壺の口縁部（同一3）も出土している。

井戸1（図版第7・9b）

志野・唐津・中国製青磁が出土している。志野（図版第7-11）は低い削り出し高台の付く茶碗で、乳白色の胎土に灰白色の長石釉が厚くかかる。釉には全面に貫入がはいる。唐津は底部に砂目の付着する碗（図版第9b-10）と低い削り出し高台の皿（同一11）である。中国製青磁は、端反りの無文碗（同一12）と外面に線描き蓮弁文のある碗（図版第7-12）が出土している。

土埴2（図版第7）

瀬戸美濃の天目茶碗（図版第7-10）が出土している。高台脇に鉄化粧が施されないもので、大窯編年のIV期に相当する。

土埴3（図版第7・9b・10a・12a）

唐津・備前・中国製青磁器が出土している。唐津には、淡褐色の胎土に淡緑色や灰色釉のかかる碗（図版第9b-1～4）や内面に胎土目のある皿（図版第7-13），簡略化された鉄絵の描かれた大皿（図版第9b-6～8）がある。

備前には、口縁端内側が斜めあるいは凹線状の段になる鉢（図版第10a-4・5）や壺（同一6・7），壺（同一8・9）には口縁に凹線の入るものとそうでないものがある。徳利（同一10・11）は小破片である。なお、壺底部には「△」の範記号がある。

中国製青磁器は、青磁碗（図版第9b-9），白磁端反り皿（図版第12a-1）や染付の小壺（同一2）破片も出土している。

内堀（図版第10b・11a・13～15）

内堀からはコンテナ數十箱を数える瓦類と少量の陶磁器が出土している。いずれも、黒色粘土層から出土したもので、層位関係は區別できない。

陶磁器には、備前・唐津・丹波・伊万里・瀬戸美濃の製品があるが、全体でもコンテナ1箱程度である。

備前には、10本程度を単位として放射状のおろし目をつける鉢（図版第10b-1・2）と内面全体につけるもの（同一3・4）がある。前者は15～16世紀代のものであるが、後者は江戸時代に降る堺産の可能性がある。また、頸部に「△」の範記号のみられる徳利（同一5）がある。

丹波は16世紀代の鉢（同一6）である。

唐津は砂目積の痕跡のある碗（同一7）や端反りの大皿、刷毛目の鉢（図版第11a-1・2）をはじめ、内面に青海波文の叩き成形痕がみられる甕（図版第10b-8）もある。

伊万里には、高台内側の釉を蛇の目状にはぎ取り、その部分に鉄を塗った青磁盤（図版第11a-13）や染付碗（同一4-8）・皿（同一9-12）がある。内面にはハリ目の跡や底部が蛇の目凹形になるものがある。いずれも17世紀後半から18世紀代のものとみられる。

その他に、17世紀代とみられる瀬戸美濃の大皿（同一3）や無釉陶器の甕、「惣」の字を描いた施釉陶器（図版第10b-9・10）が出土しているが、产地・時期は不明である。

瓦は多量に出土している。さきの『浜津高櫻城』での森山分類に従い概要を記していくが、すべてⅡ期以後のものである。

軒丸瓦（図版第13a・14a）は、いずれも三ツ巴文と珠文をめぐらしたものである。Ⅱ期のものは、圓線をめぐらすもの（図版第13a-1・7, 14a-1）とやや小振りで三ツ巴文が右巻きのもの（図版第13a-2・14a-2・3）がある。なお、三ツ巴文が右巻きのものは今回の調査ではこの資料だけに限られる。Ⅲ期（図版第13a-3）のものまでは相対的に胎土が粗く、風化の度合いもかなり進行しており、灰白色を呈すものが多い。

Ⅳ期（図版第13a-4・8・9）からV・VI期（図版第13a-5・6, 14a-5～7）のものでは、周縁の幅が広く、珠文や巴文の頂部も大きく平坦になる。また、表面は銀黒色を呈すものが多い。

特徴の判る軒丸瓦の破片約70点を分類したところ、Ⅱ期が30%, Ⅲ期が22%, Ⅳ期が10%, V・VI期が38%である。

軒半瓦（図版第13b）もすべてⅡ期以後のものである。最も多量に出土しているのは、普門寺I（図版第13b-1）とされた3葉の菊花を中心飾りとするもので、高櫻城では当調査区で初めて出土した。Ⅱ期のものでは上端を面取りしたⅢ類（同一2）も出土している。

Ⅲ期のⅣb類（同一3）は普門寺Iについて多く出土したもので、中心飾りに3子葉をおき、左右に大小の唐草を配している。Ⅳ期のⅥb類（同一4）は左右対称の上向きの唐草文を中心におき、下位に双頭渦文状の唐草を配している。中心飾りに十字をおき、大きく反転する唐草を配しているもの（同一5）は、初めての出土である。唐草の状態など金竜寺Ⅱに類似するためⅣ期としておく。V期のものは花冠と萼を中心飾りとするXI類（同一6）である。

軒丸瓦同様、特徴の判る破片26点でみたところⅡ期が46%, Ⅲ期が30%, Ⅳ期が3%, V・VI期が11%であった。

小型の巴文瓦（図版第14b-1・2）や輪違い瓦（同一3・4）も若干出土している。

丸瓦は全長25cm前後、29cm前後、35.5cm（図版第15a-1～3）の三者がみられる。全長25cm

前後のものが最も多く、35.5cmを測るものは1点のみである。

鬼瓦は左巻きの巴文（図版第15b-1）で、周縁が欠けている。その他、熨斗瓦（同-2）や平瓦も数多く出土している。

包含層・整地層（図版第116・12a）

つぎに、暗灰色粘土層および整地層出土遺物について述べる。暗灰色粘土層から出土した遺物には平安時代のものもあるが細片であるため、ここでは弥生式土器（図版第11b-1～5）を報告する。いずれも畿内第V様式に属するもので、壺・瓶・壺の破片である。

整地層からは、弥生時代畿内第I様式に属す沈線のある壺や壺（同-6・7）、第II様式の壺・鉢（同-8～10）、第V様式の壺（同-11）、古墳時代の壺・壺（同-12・13）も出土している。

整地層出土の中国製器には染付・白磁・青磁がある。染付は器壁の薄い芙蓉手の鉢（図版第12a-3・4）や碗（同-5・6）・皿（同-7）がある。また、見込みに人物像を描く碗（同-8）や、白磁には端反り口縁の皿（同-9・10）や11～12世紀に盛行する碗（同-17）がある。青磁には刻先蓮弁文（同-11）をはじめ端反りの無文（同-12）のものや、内底にスタンプ文のあるもの（同-13・14）がある。15はゴケ底の青磁皿である。青白磁の合子（同-16）も出土している。緑釉陶器（同-18～20）は平安時代後期で、京都近郊窯の製品である。灰釉陶器（同-21）は東濃窯の折戸53号窯跡とみられる。

その他、備前の皿（図版第12b-1・2）や壺（同-3）、丹波の鉢（同-4）、唐津の皿（同-5・6）、信楽の壺（同-9）・鉢（同-10）さらに水指の蓋（同-11）が出土している。

第3章 まとめ

当調査区では、城郭東側の内堀を確認できたのをはじめ、近世高槻城以前の様子を知る手がかりが得られた。以下、今回の調査の成果を記してまとめてかえる。

遺構の項で記したように、調査区の遺構は古代末、近世高槻城以前、近世高槻城の三期に大別することができる。

遺構としては確認されなかったが、弥生時代前期から後期の土器が出土しており、周辺に集落が営まれたらしい。古代末の遺構は数個の平安時代後期の柱穴が確認されただけであるが、柱穴には掘り方のしっかりしたものがみられ、遺物には緑釉・灰釉陶器がある。また、やはり遺構は確認できなかったものの、平安時代末から鎌倉時代にかけての中国製の青白磁合子や白磁が出土している。調査区中央部から西側にかけて擾乱をのがれた地区に若干検出された柱穴が鎌倉時代末から南北朝期にかけてのものであるため、古代末から南北朝期にかけて相当規模の集落が営まれたものとみられる。

高槻城周辺の古代から中世にかけての集落としては、西北約0.5kmに位置する上田部遺跡や東南約1kmには、天川・中寺遺跡がある。上田部遺跡は奈良時代の水田が確認されているが、天川・中寺遺跡は平安時代末から鎌倉時代にかけて出現するものである。とくに、天川・中寺遺跡はその位置するところから、平安時代末の低湿地開発を考えるうえで注目されてきた。今回の調査で確認された、平安時代末から南北朝期の集落の存在は、淀川の形成した低湿地へむけて高槻の各地域で一斉に開発が着手されたことを物語っている。

近世高槻城以前の遺構としては、16世紀代の溝1・2、石敷、土塙2と16世紀末から17世紀初めの井戸1、土塙3などがある。

溝1出土の遺物群は製作時期に前後が認められるものの、15世紀から16世紀前後にかけての特徴を表わしている。すなわち、土師器皿は、天文元年（1532）焼亡の京都市山科本願寺出土例と類似し、瀬戸美濃製品も15世紀後半から16世紀前半に位置づけられる。中国製磁器では、高台を扶る白磁皿や青磁碗のように15世紀を中心とするものもあるが、染付や端反り白磁皿は16世紀前後に特徴的なものである。備前も鉢の口縁部があまり拡張しない不老山東口窯を指標とするIVb期と、不老西口窯を指標とするV期のものがあり、15世紀後半から16世紀代である。このなかで、口縁端内側に凹線状の段のあるものは、16世紀でもより後出の慶長期に位置づけられる傾向にある。しかし、岡山県富山城、堺環濠都市のIV期、すなわち16世紀後半代にも若干報告例がある。土師質羽釜のうち「く」の字状口縁のものは堺環濠都市のIV期にあり、他の瓦質鉢など年代的位置づけがもうひとつ不明確なものもあるが、前述のように16世紀前後を中心に15世紀から16世紀後半の遺物を含んでいる。量は少ないが、石敷、土塙2出土遺物も同時期とみられる。

さて、溝1には焼土が多量に含まれ、遺物類は火災後の整地時に一括投棄されたものとみられる。溝1南側の石敷は溝とほぼ直交するため同時存在の遺構とみられるが、この付近から南側にかけて焼土面が確認されている。高槻城における火災の記録としては、天正元年（1573）に高山飛驒守・右近親子が和田惟長を追放した際に、「城内は櫓2ヶ所と小塔1ヶ所を残すだけとなった」とする記事がフロイスの『日本史』にみられる。溝1、石敷、土塙2は高山氏が高槻城主になる以前、すなわち和田氏時代の遺構で、高山氏によるクーデター後に埋められたものとみられる。

和田氏・高山氏時代の高槻城の繩張りについては、ほとんど判っていないが、溝1が内堀と同じ方向に掘削されていることは、今後の近世高槻城以前の繩張りを知るうえで、ひとつの手がかりといえる。

井戸1、土塙3からは15-16世紀代の備前や中国製磁器が出土しているが、唐津の碗・皿、志野の茶碗も出土している。唐津・志野は16世紀末に出現するものであるから、廃棄年代は16

世紀末から17世紀初めとみられる。

この時期の城主は新庄直頼であるが、慶長5年（1600）の関ヶ原合戦では西軍に応じたため、高槻城は徳川氏直轄となった。井戸1、土塙3の廃棄年代はこの時期に合致し、とくに、土塙3の調査中の状況からみて、既存の建物を一気に壊したことがうかがえる。検出遺構が少ないため確証を欠くが、徳川氏直轄になった際にある程度の修築が行われたと想像される。

なお、井戸1出土の志野茶碗や整地層出土の信楽焼の水指蓋は、城内で茶の湯が行われていたことを想像させる。

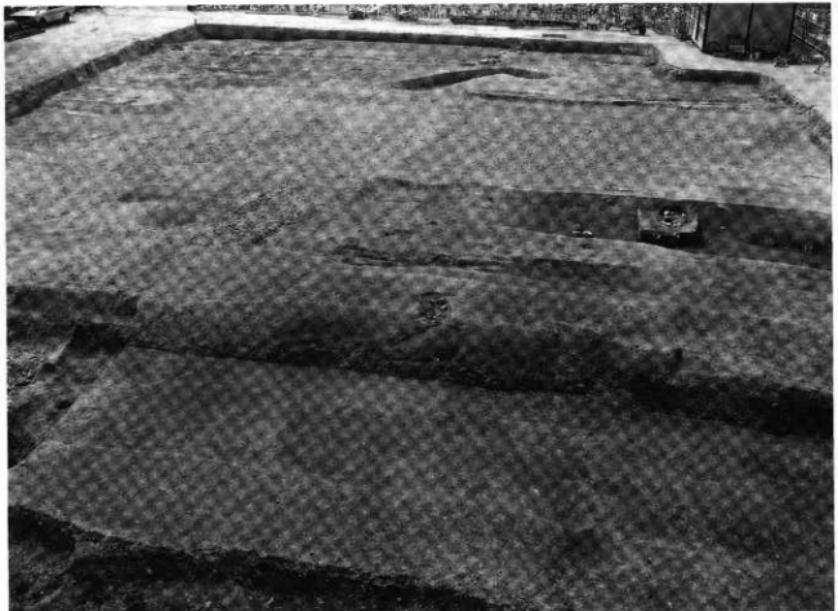
内堀の調査では樹形門の栗石を確認することができ、その基礎の掘り方も検出できた。栗石の散乱状況や、調査途中で出土した花崗岩などからみて、高槻城破却時に、この樹形門の石垣も破壊されたものとみられる。

絵図には、内堀に沿って土岸が描かれているが、整地によって完全に消滅したらしく、今回の調査では確認できなかった。また、絵図には樹形門北側に、百石服部氏の居宅が描かれているが、内堀からの出土遺物は瓦が大半を占め、生活用具は極めて少ない。

瓦類には、元和3年（1617）高槻城の公儀修築期の瓦類をはじめ、17世紀から18世紀にかけての瓦類も出土している。軒丸瓦では半数程度が17世紀後半以後のものであり、しばしば瓦が差し替えられたことがわかる。

今回の調査では脇郭東側の内堀および樹形門が、「揖津高槻城」で比定された位置に合致していることが判明したのをはじめ、近世高槻城以前の様子を知ることができ、今後の高槻城解明にとって少なからぬ資料を得たといえる。

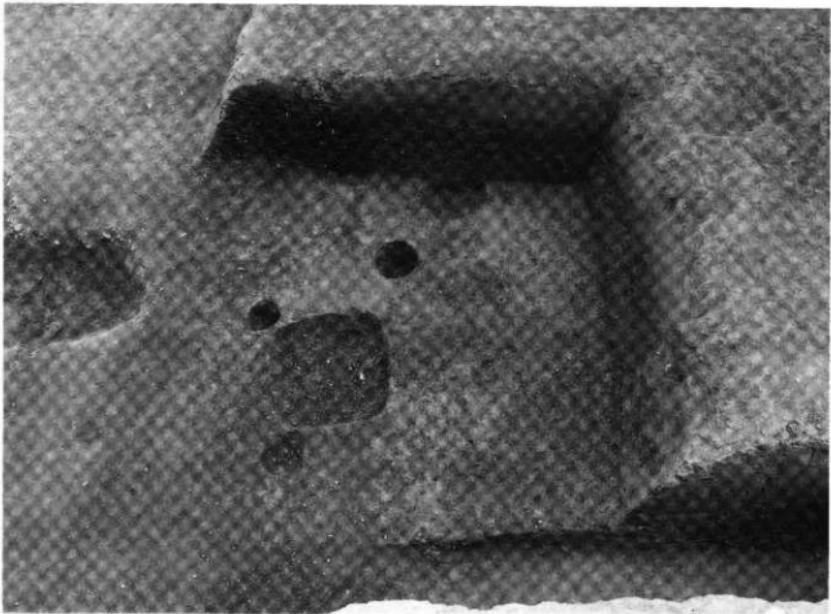
図版



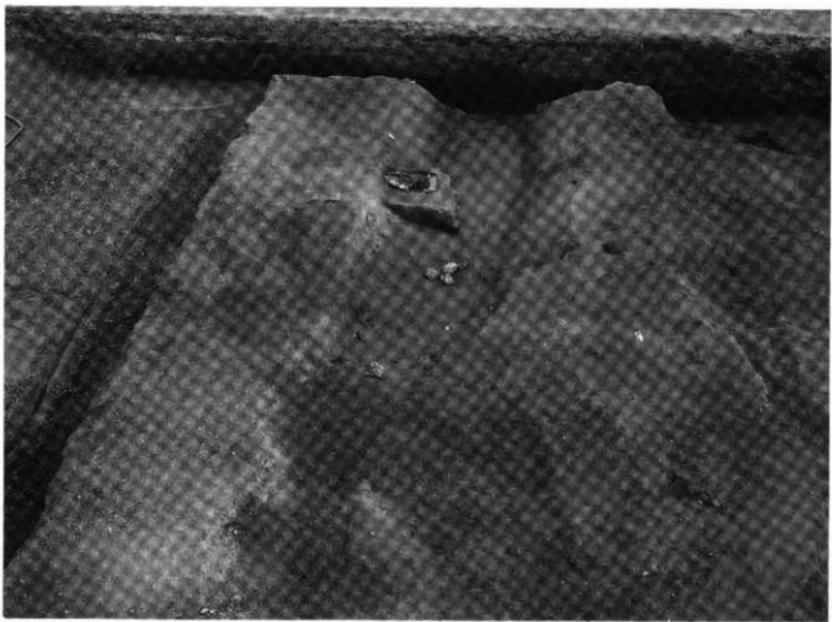
a. 調査区全景（東側から）



b. 調査区東半部（北側から）



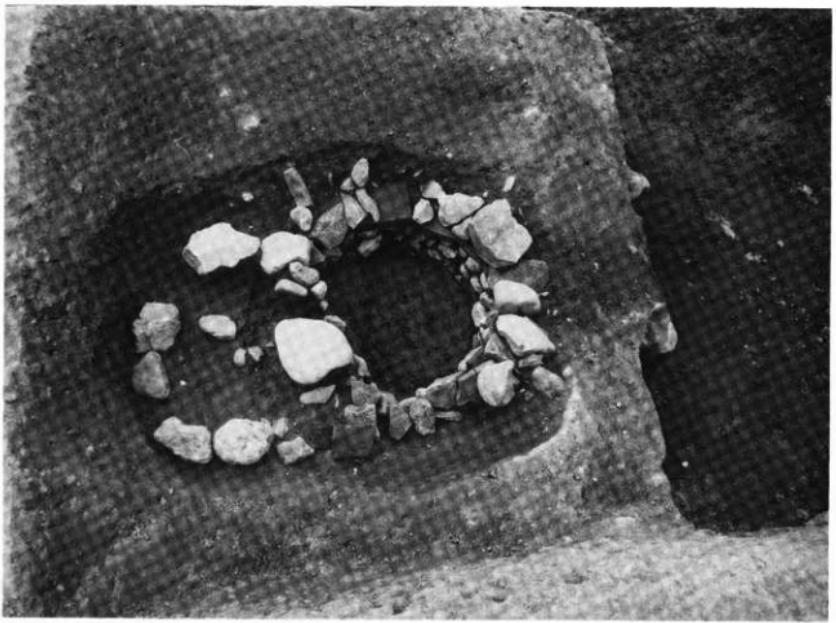
a. 調査区東北部下層造構（北側から）



b. 溝1（南側から）



a. 石敷 (東側から)



b. 井戸1 (南側から)



a. 内堀（北側から）



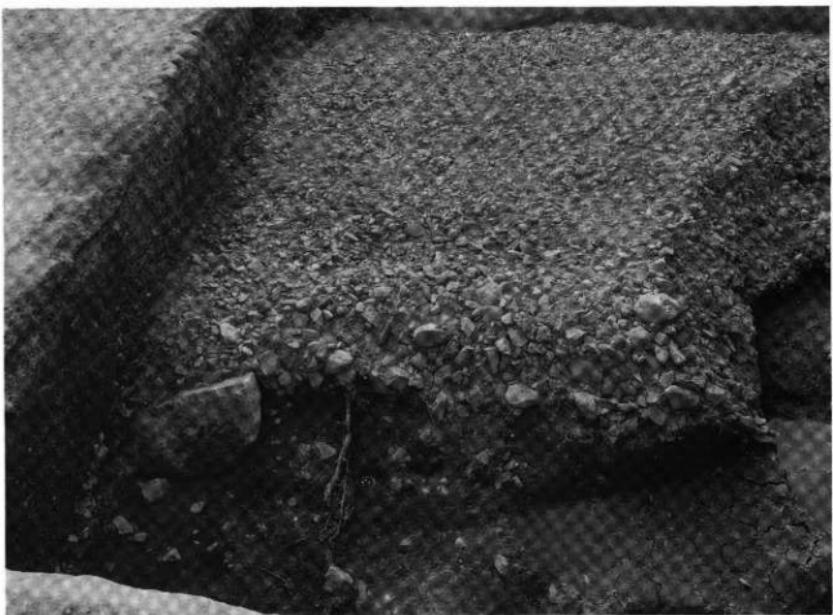
b. 内堀（南側から）



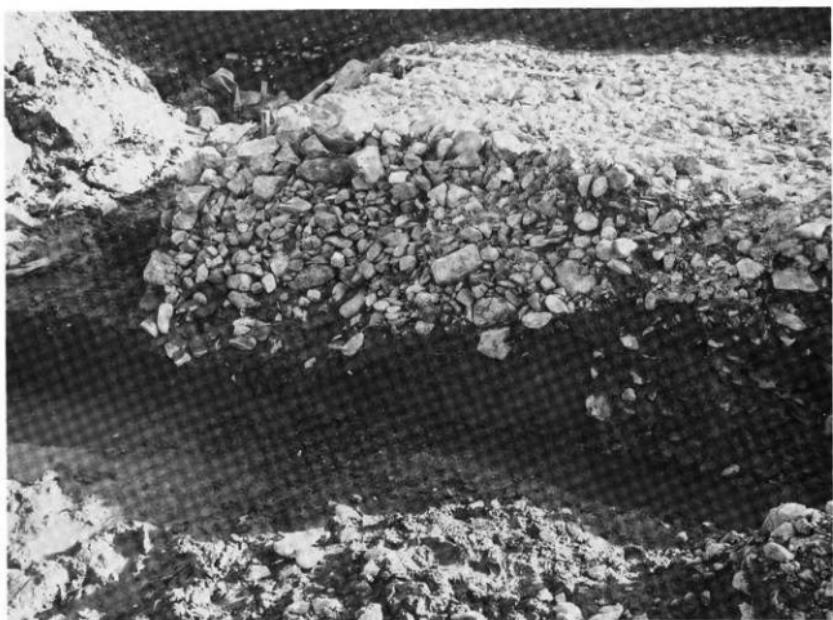
a. 内堤断面（南側から）



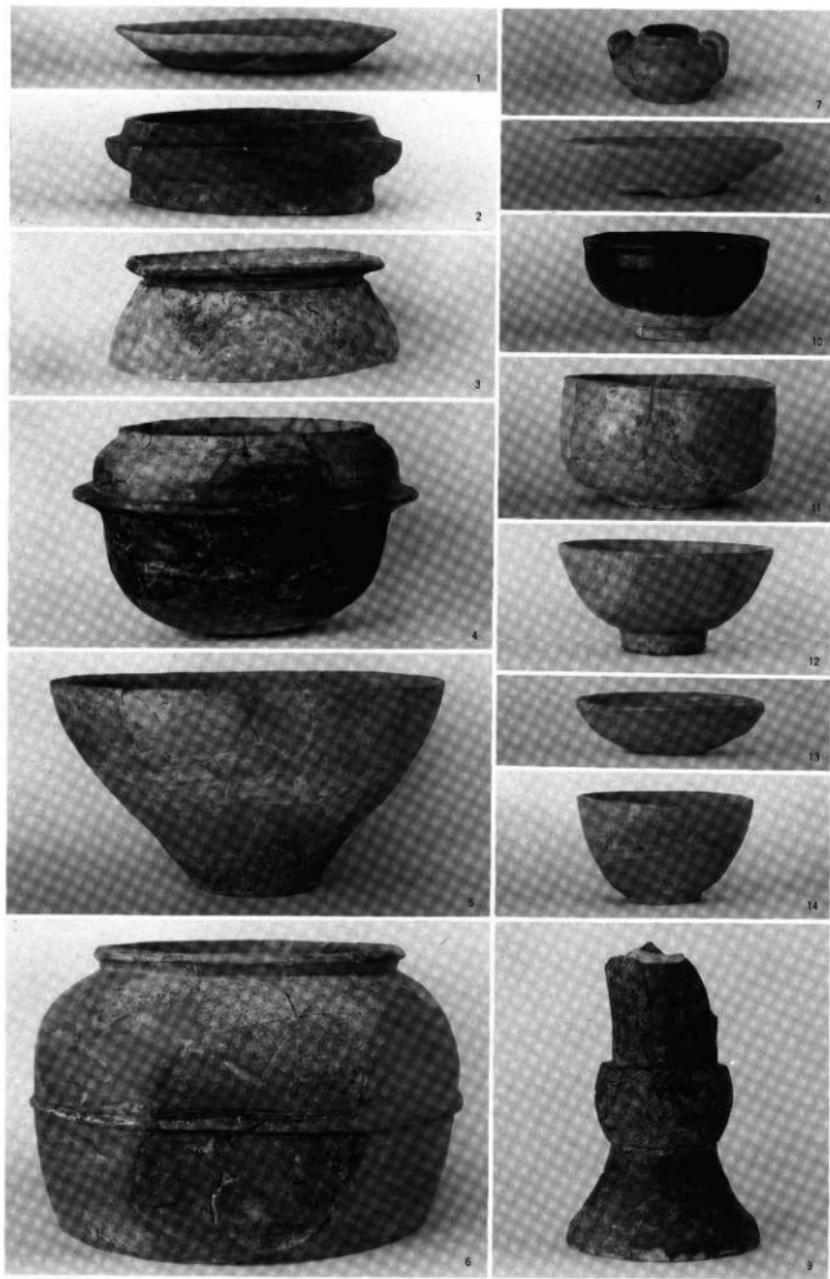
b. 内堤断面（南側から）



a. 栗石検出状況（東側から）



b. 栗石たち割り状況（北側から）



溝1出土遺物(1~9), 土坑2出土遺物(10), 土坑3出土遺物(13), 井戸1出土遺物(11・12), 内堀出土遺物(14)

1. 口径17cm・高さ2.5cm, 2. 口径15cm・高さ5cm, 3. 口径16cm, 4. 口径15cm・高さ12.8cm, 5. 口径32cm・高さ17cm

6. 口径25cm・高さ22cm, 7. 口径5cm・高さ2.7cm, 8. 口径9cm・高さ2cm, 9. 底径11.5cm, 10. 口径11.8cm・高さ5cm

11. 口径13cm・高さ7.5cm, 12. 口径13.4cm・高さ6.4cm, 13. 口径11.4cm・高さ3cm, 14. 口径10.8cm・高さ5.8cm



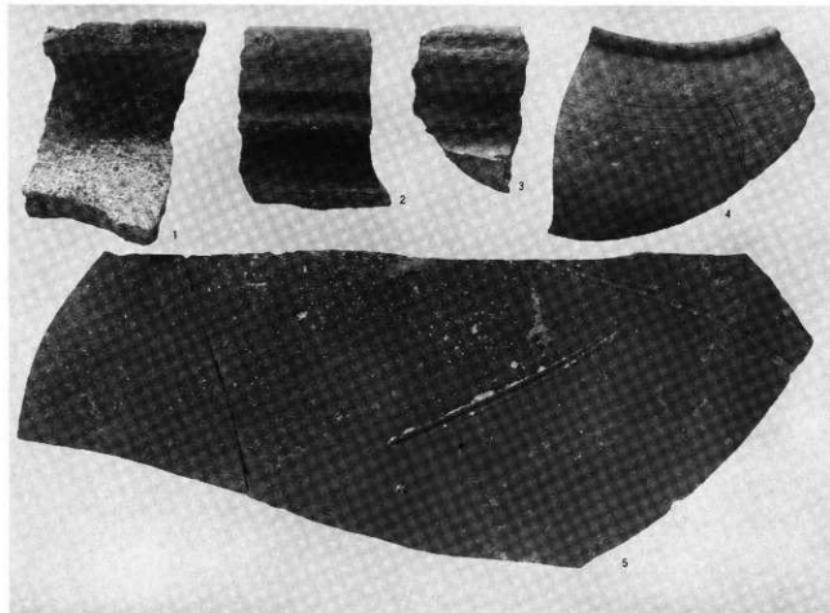
a. 溝1出土遺物 (1~12) 染付 (1・2), 白磁 (3), 青磁 (4), 濑戸美濃 (5~11), 土師器 (12)
石散出土遺物 (13・14) 濑戸美濃 (13・14)

約1/2



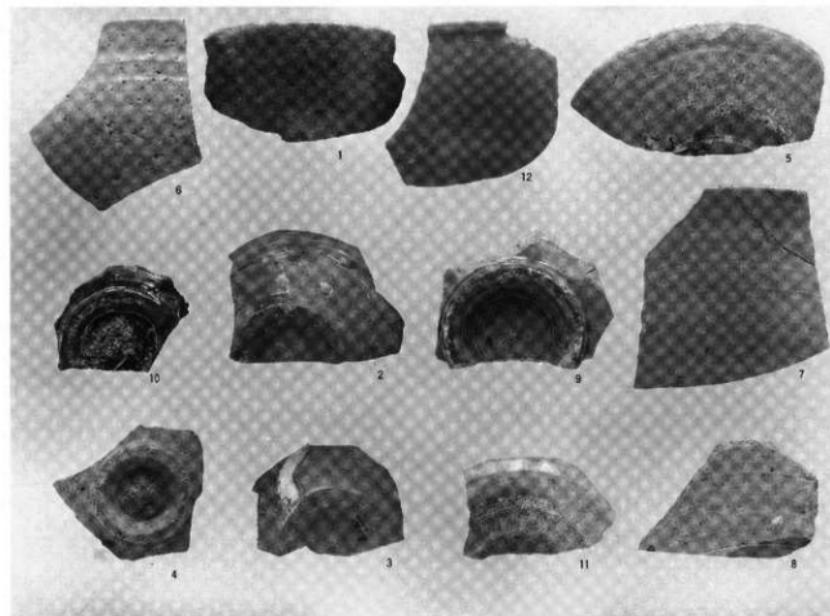
b. 溝1出土遺物 備前 (1~6)

約1/2



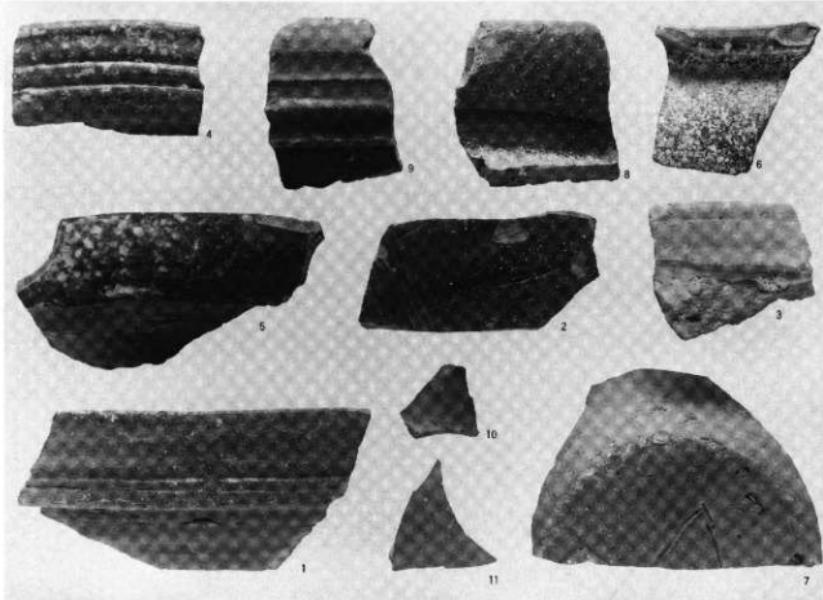
a. 溝1出土遺物 信楽(1), 備前(2~5)

約1/2



b. 土坑3出土遺物(1~9) 唐津(1~8), 中国製青磁(9)
井戸1出土遺物(10~12) 唐津(10・11), 中国製青磁(12)

約1/2



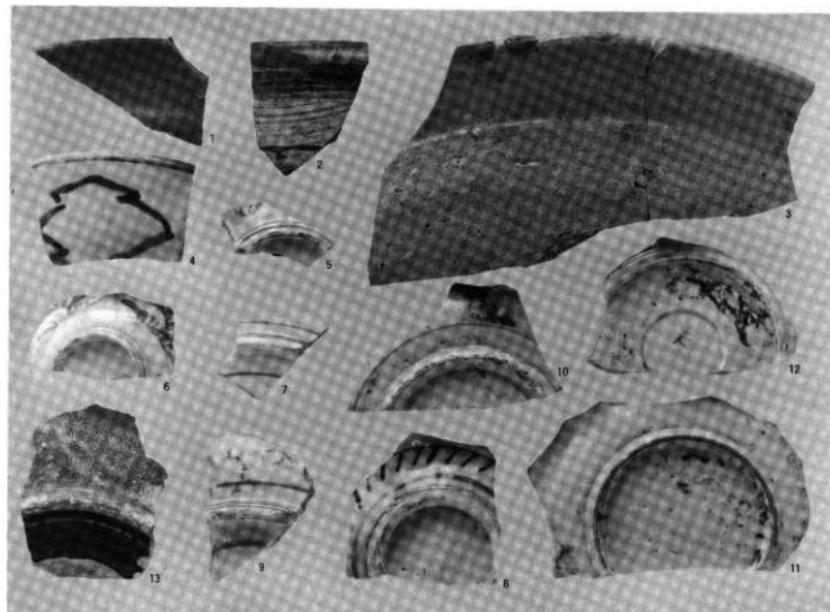
a. 石数出土遺物 (1~3) 備前 (1・2), 信楽 (3)
土塹 3 出土遺物 (4~11) 備前 (4~11)

約1/2



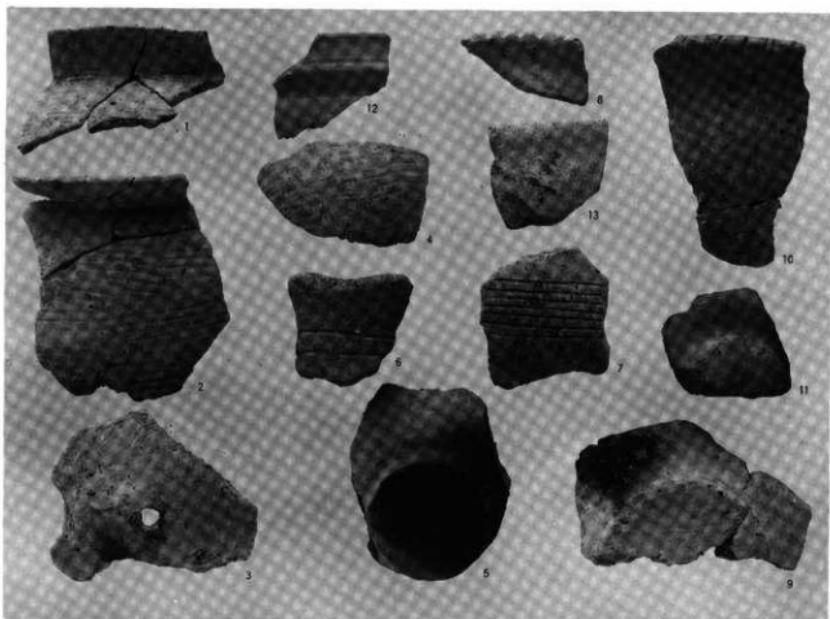
b. 内堀出土遺物 備前 (1~5), 丹波 (6), 唐津 (7・8), 不明 (9・10)

約1/2



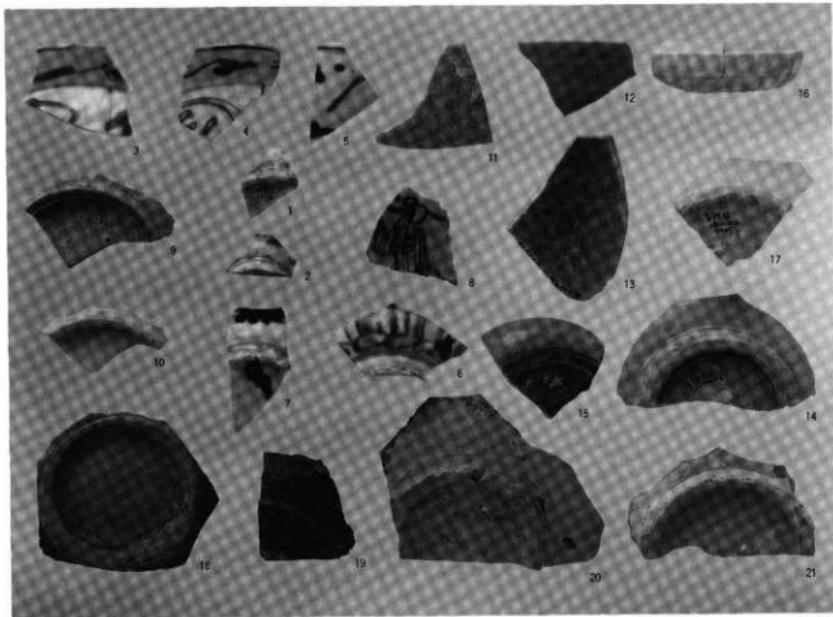
a. 内掘出土遺物 唐津(1・2), 濑戸(3), 伊万里(4-13)

約1/2



b. 暗褐色粘土層出土遺物(1~5), 整地層出土遺物(6~13)

約1/2



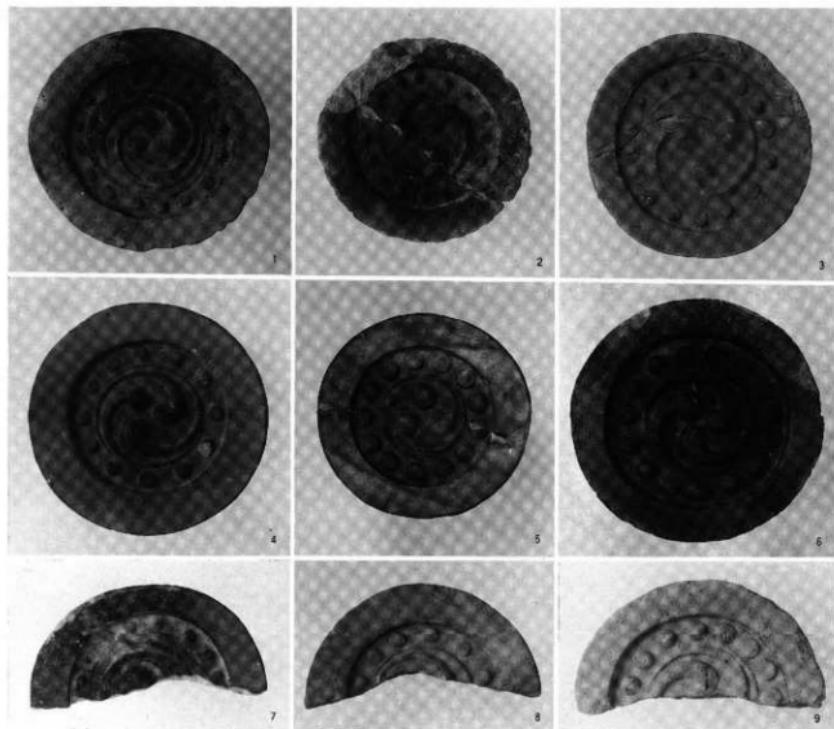
a. 土塀 3 出土遺物 (1~2), 整地層出土遺物 (3~21) 中國製磁器 (1~17), 緑釉 (18~20), 灰釉 (21)

約1/2



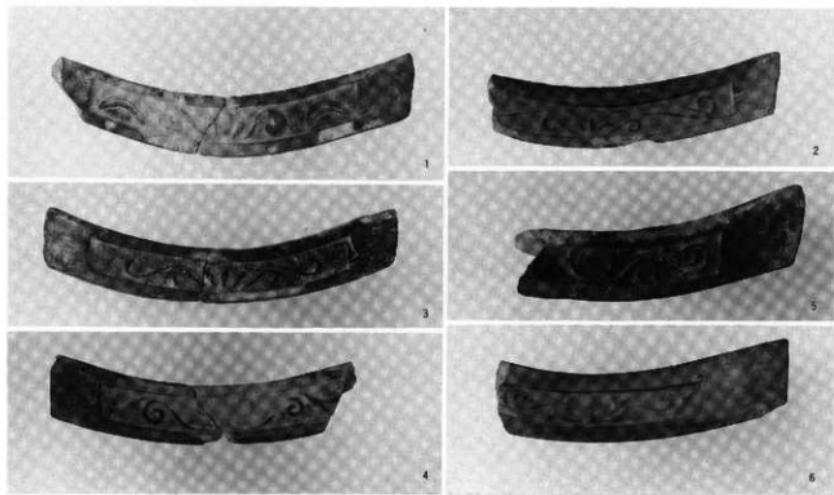
b. 整地層出土遺物 備前 (1~3), 丹波 (4), 唐津 (5~8), 信楽 (9~11)

約1/2



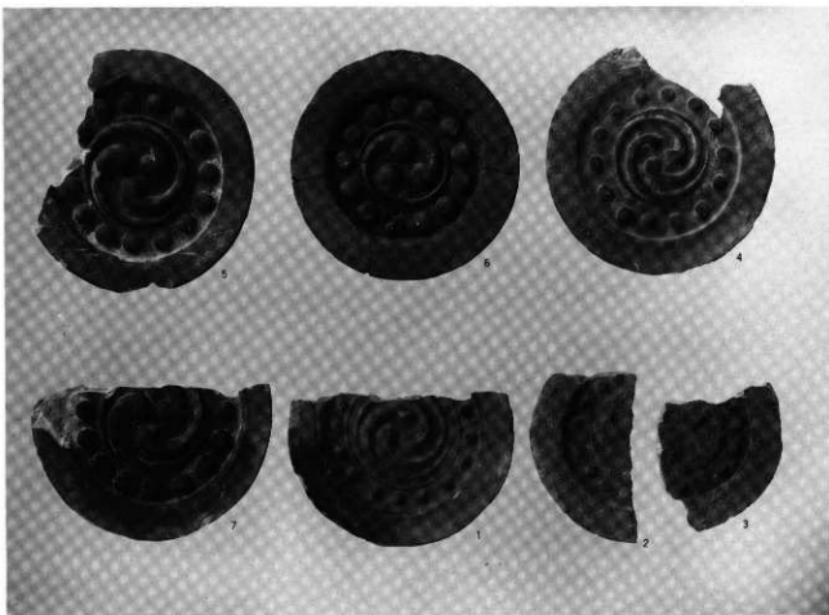
a. 内堀出土軒瓦

約1/3



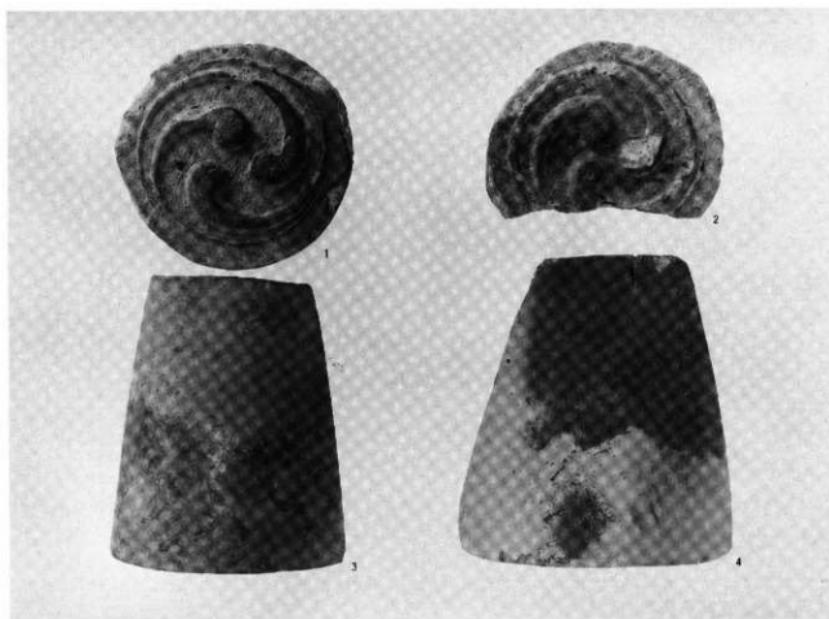
b. 内堀出土軒平瓦

約1/3



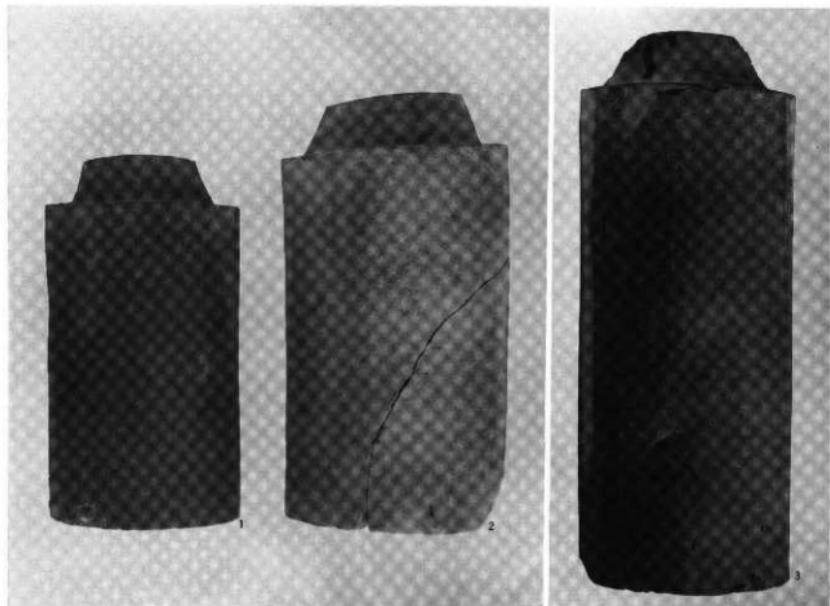
a. 内堀出土軒瓦

約1/3



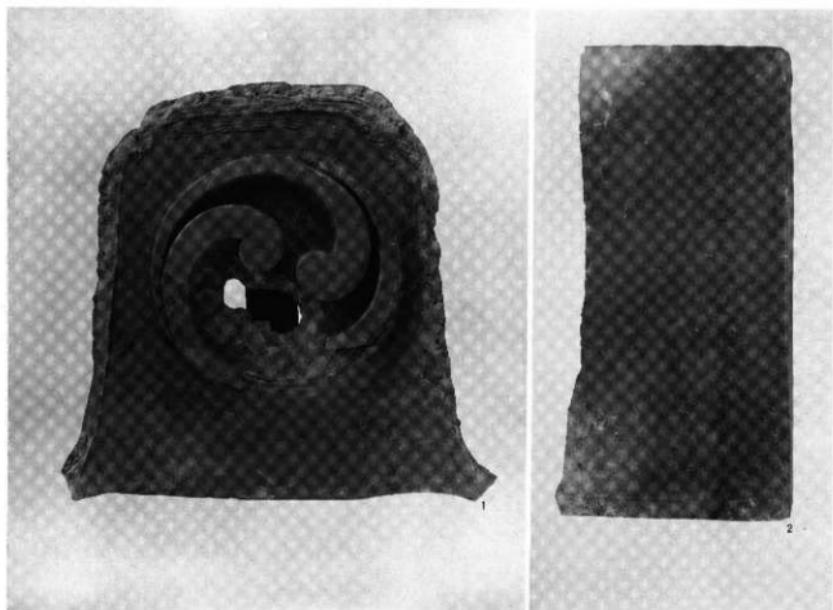
b. 内堀出土瓦 小型巴文瓦(1・2), 輪違い瓦(3・4)

約1/2



a. 內堀出土瓦

約1/3



b. 內堀出土瓦 魚瓦 (1), 裝斗瓦 (2)

約1/3

